

安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.19

明科塔ノ原地区

—歴史ロマンの水郷を訪ねて—

安曇野市の東部、犀川の右岸に位置する明科は、明科廃寺跡の発掘により、白鳳時代から平安時代にかけて寺院が存在していたことが分かり、犀川に沿った古道やサケの捕獲の記録などと合わせて考えると、古代から文化や経済上重要な位置にあったと推測されます。「塔ノ原」の地名の由来は明科廃寺に大きな仏塔が建っていたことによるとも、八面大王の頭部が埋められたからとも言われています。



編集・発行
安曇野ふるさとづくり応援団

URL <http://azumino-furusato.com>

※本マップは公式サイトからダウンロード可能です

◆コースタイム ※時間は歩速3km/時としての目安です（休憩含まず）

スタート 御宝田遊水池→約0.5km＊10分→養魚場→約0.7km＊14分→源川山雲龍寺→約0.8km＊16分→中耕地石造文化財群→約0.7km＊17分→犀宮神社→約1.3km＊26分→

ゴール 御宝田遊水池 【合計】約4.0km：1時間20分



このコースは河岸段丘の上下を行くので多少の起伏がありますが、アルプスと安曇野の展望を楽しめる道ですよ♪

※私有地への立入はご遠慮下さい。



(a) 爽快な犀川下り
カヌーやラフティングは夏の風物詩



(b) 三川合流地点は太公望のメッカ
ニジマスやブラウントラウトの大物狙い



(c) 中耕地石造文化財群
安曇野の中でもユニークな道祖神



(d) 犀宮社の御船祭
飾りつけは穂高神社の人形師



(e) 水郷明科の清流
NHKの連続ドラマ「おひさま」のロケ地

平成26年度 長野県地域発元気づくり支援金活用事業

① 御宝田遊水池

犀川は古来より洪水によって流路を頻繁に変えてきました。とりわけ三川合流の地付近は高度差が少ないために田畑が消失したり、村境が不明になるなど洪水被害は大きくなりました。対岸の穂高側では御法田と書きますが、明科側では御宝田と書きます。八面大王を祀っていた大きな神社・御宝殿があったからとされています。



白鳥が飛来する御宝田遊水池

② ニジマス養殖業発祥地

倉科多策が大正15年(1926)に、私財5万円を投じ、湧水を利用して明科養鱒場を設け、長野県に無償で貸与したのが始まりです。その後、水産試験場が作られ養殖の研究が行われました。その結果、安曇野ではニジマスが適していることが判明し、民間でのニジマス養殖が盛んになり、昭和30年代には欧米への輸出産業の花形となりました。



養殖池

③ 塔原館跡(上手屋敷)

鎌倉時代、川手郷の地頭となって東信から川手に進出してきた海野氏の一族・塔原氏が塔原城とともに築いた居館跡。明南小学校及び中学校敷地の南部一帯にあり、上手屋敷と呼ばれました。戦後開田されるまでは堀跡もあり、南側には泉がいと、腰巻、西側の下段には北屋敷・町・町屋敷等の地名があり武士が居住していたとされます。



小中学校の敷地が塔原氏の館跡

④ 源川山雲龍寺

大同2年(807)に開創されたと伝わる古刹。元禄時代には七堂伽藍を備え、寺中に子院養泉院を構えた大寺でした。本尊の大日如来像は文明2年(1470)の銘があり、塔原氏により東信から移されたものと言われています。寺宝として、諏訪出身の名工・立川和四郎と潮の名工石井佐兵衛の合作とみられる大黒天像があります。



源川山雲龍寺の山門

⑤ 犀宮社

泉小太郎が犀龍に乗って犀川の流れを開いたという治水伝説が残る神社。母の犀龍は身体が赤かったことから「赤龍」といわれ、祭礼で「赤幟」を立てるのはこのためだと言われています。境内には八面大王を祀る社もあります。明治35年(1902)に篠ノ井線が境内を通過して敷設されたため境内が損なわれてしまいました。



線路で分断された犀宮社の境内

⑥ 旧八十七共有地

三川合流地点はしばしば氾濫に見舞われてきました。氾濫の度に田畑が流されて境界が不明となり争いが繰り返されてきました。このため、享保年間には八十七人割りの共有地として、田地が流れた時には割り合うことになりました。八十七共有地は大正の堤防建設で流路が安定するまで続き、農地改革によって個人所有となりました。



旧八十七共有地

⑦ わさび田

竹田信平が耕地整理組合長として、河川敷を開発整理をし、大正末年に、わさび栽培を塔ノ原側へ導入しました。

犀川の流路が穂高寄りになるまでは大王わさび農園付近まで塔ノ原側のわさび田が広がっていましたが、現在は規模が縮小され3haほどになっています。



わさび田

水産あかしな

昭和15年(1941)まで安曇野では河川ばかりでなくわさび田の水路付近まで鮭が遡上していました。塔ノ原では鮭が100尾獲れると旗が揚げられたそうです。その後発電所のダム建設で鮭の遡上が途絶えたため、電力会社の漁業補償などによって水産試験場が作られ、養殖の研究が行われました。その結果、ニジマスが有望とのことで本格的に養殖業が始まりました。

30年代には生産量の80%が輸出され輸出産業の花形でしたが、42年のオイルショックで激減、現在はニジマスとブラウントラウトを交配した信州サーモンの養殖に力を入れています。

